

日本語コミュニケーション教育方法に関する研究

橋本, 恵子

<https://hdl.handle.net/2324/2236343>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (芸術工学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 橋本 恵子

論 文 名 : 日本語コミュニケーション教育方法に関する研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 約

本研究の目的は、大学生の日本語コミュニケーション能力の育成、グループ・コミュニケーション能力(議論力、協働力、対話力)の育成を目指した演習コースを開発し、その教育実践結果について、実証データを基に検証することである。議論、対話については、物理学者であり思想家でもある David Bohm の提唱するダイアログ理論、それに加え、精神科医療現場で導入されつつあるオープンダイアログの手法を教育現場に取り入れた点に大きな特徴と新規性がある。オープンダイアログネットワークジャパンが日本に設立され、オープンダイアログというシステムが日本に紹介されて 3 年であるが、未だ正確にその手法が精神医療関係者に理解されているとは言えず、ましてや教育現場にその手法を導入するという教育実践例は見られないのが現状である。また、時枝誠記の言語過程説を、文法論ではなく、日本における最初のコミュニケーション論として捉えた点は他に管見することができないという点で新規性に富むものである。

具体的には、日本語コミュニケーション能力の中でも、特にスピーチによる言語コミュニケーション能力、対話力を中心としたグループ・コミュニケーション能力を、実践力と理論の両面から育成するためのカリキュラムの開発を目指す。また、グループ・コミュニケーション能力育成を目指した演習コースを実施し、各学生の学習状態とグループ・コミュニケーション能力を測定・評価することで学生の論理的構成力、対話力、協働力、議論力の変容について検証するものである。ここでいう対話とは、単に自分の意見や意思を相手に伝達するモノログ的対話を超え、他者との関わり合いの中で自他ともに変容し、異なる見解を理解するという意味での「開かれた対話」(オープンダイアログ)を指す。この「開かれた対話」とは、フィンランドで独自に開発されたケアを共有するシステム及びケアの手法である。

本研究は、筆者が開発した「スピーチ構成図」を、日本人大学生だけでなく、日本語教育分野(日本語非母語話者を対象)にも活用し、総合的な日本語コミュニケーション能力の育成を図るための授業モデルを開発・検証すると共に、グループ・コミュニケーション能力の育成を図ることを目的とした。授業モデルは、「アニメーション」の概念を応用することで、認知面だけでなく情意面にも配慮し、論理表現育成のための「スピーチ構成図」とグループ・コミュニケーション能力育成のための「コラボ・ディスカッション」(collaborative discussion)を総合的に取り入れた点が特徴である。

アニメーション(animatiion 仏、animacion 西、animazione 伊)とは、ラテン語の anima(魂・精神・生命)を語源とする言葉であり、魂・生命を活性化することを意味する手法である。アニメーションの概念を取り入れた教育方法によって、自然な日本語コミュニケーション能力を育成することができる。日本語コミュニケーション教育へのアニメーションは、日常の諸問題を解決するための日本語コミュニケーション能力(言語技術)を、楽しみながら、学習意欲をもって、質の高いコミュニケーション能力を身につける方法として最適であり、効果的であると考えられる。このアニメーションという用語は、日本ではまだ一般的な用語ではないが、フランスやスペイン、イタリア等では、文化・教育・社会活動その他を活性化する取り組みの中で、広く使われている重要な概念である(増山 1997:6)。これまでの研究では、主に認知面に焦点を絞った授業設計と評価を実施してきたが、

今後の展開として、情意面へのアプローチも視野に入れた研究内容とした。

自分の言いたいことを論理的に構築し、一方的に発表するだけでは真の意味でのコミュニケーションがなされたことにはならないと考えた。何故なら、コミュニケーションで重要となる双方向性や相互作用が生じないからである。そこで、今後ますます必要とされるであろう「グループ・コミュニケーション能力」を、筆者が提案する「コラボ・ディスカッション」を導入することで育成できることを実証するものである。このコラボ・ディスカッションによって、学習者は「対話」、「協働」によるグループ・コミュニケーション能力を育成・向上させることができ、自分の意見をどのタイミングでどのように相手に伝えればより効果的に議論がなされるのかを学ぶことができる。

本論文の構成は次の通りである。第1章では、日本語による言語行動である日本語コミュニケーションの特質について概観し、コミュニケーション論としての時枝誠記の言語過程説について述べた。第2章では、日本語力（日本語コミュニケーション）を高めるための教育方法について述べた。具体的には、論理的な文の表現に必要となる文の理解のため、第1章で述べた時枝の言語過程説、入子型構造を用いた文の理解と分析のための教育実践とその教育効果について述べた。当初、日本人学生に対して実践したところ効果が認められたため、上級日本語話者への日本語教育にも有用なのではないかとの仮説を立て、日本語教育に本教育実践を取り入れ、日本人学生と上級日本語話者との比較研究を実施した。第3章では、スピーチコミュニケーション教育の具体的教育実践とその効果について述べた。前章の教育実践では、論理的な文の構築能力を向上させるものであるが、次の段階では、相手に分かりやすい文章を構成する能力の向上が求められる。そこで、本章では、筆者が開発した「スピーチ構成図」（橋本 2005）と、コミュニケーション指導に向けた「スピーチ構成図」を使った教育実践の改良（橋本 2009）について述べた。「スピーチ構成図」では、主に独話能力と論理的な文章構成力の育成と向上を目的とし、改良版の教育実践では対話力を育成する要素を新たに取り入れ、協働によるグループ・コミュニケーションへの橋渡しとした。第4章では、対話力・共話力・議論力をグループ内で向上させるために、グループ・コミュニケーションについて述べた。具体的には、グループ・コミュニケーション能力育成のために必要となるディスカッション教育について、その教育実践と分析結果、課題について述べた。前章では、基本的に発表者（スピーチを行う学生）と聴衆という立場でのコミュニケーションを中心に述べたが、本章では、複数人でのコミュニケーションに焦点を当て、時枝がいう所の表現行為そのもの、理解行為そのものを同時に体験する場を創出した。第5章では、弁論者に対する印象評価について述べ、学習者がどのようなスピーチコミュニケーションスタイルを好ましく感じるのかを明らかにした。スピーチの内容を論理的に構築する能力だけでなく、好ましいスピーチスタイルについて考察を加えた。具体的には動画を使用した印象評価調査を行ったことで、話し方や声の調子、表情、立ち居振る舞い等がスピーチの評価に与える影響について検討を加えた。第6章では、好ましいスピーチスタイルを明らかにすることを目的に、演説資料の分析を試みた。分析には音声資料を用いたため、表情や動作等を確認することはできない。そのため、純粋に言語によるコミュニケーションスタイルを分析することが可能である。第7章では日本語学習者の「コンピュータ用語に関する実態調査」を日本・中国・韓国・ベトナムの4カ国で実施した結果について述べ、留学生向けの情報処理演習（パソコン基礎演習）のカリキュラム試案を提案し、その知見によって開発した教材について述べた。本章では、日本・中国・韓国・ベトナムの日本語学習者のコンピュータ用語習得状況に関する比較分析結果について述べた。日本語で学ぶパソコンリテラシー教材を開発することで、日本語とパソコンリテラシーを同時に向上させることができる。つまり、パソコン操作を学ぶことを通して、それに付随する日本語表現を学び、語彙を増やし、日常生活上必要となるカタカナ用語の習得を促すことが可能となり、結果として日本語コミュニケーション能力育成に寄与することができる。終章では、

本論文の意義と新規性、独自性についてまとめるとともに、今後の課題について述べた。